

第42期 松本史朗

我々42期は入学以来、公式戦での勝利というものに無縁であった。2年生の秋の大会終了後、チームを率いるにあたり、秋の公式戦で、1つでも多く勝ち進むことが目標であった。歴代の先輩方にくらべると、情けない目標ではあったが、それが現実であった。新チームになって最初の公式戦である1月の新人戦は、何とか1回戦は4対0という極どいスコアで勝ったものの、2回戦であっけなく敗退してしまった。

4月になり、新入生も入り、文字通り新しいチームになり、練習に励んだが、4月の関東大会予選は又もや1回戦での敗退であった。内容も、前半を8対4とリードしながら、終わって見れば8対29という惨めな逆転負けである。相手は都立田園調布高であった。同じ都立高に負けることは、特に悔しいものであった。

6月には、都立青山高の創部40周年記念行事に招かれた。世田谷区菅グランドでの試合には負けたが、ゲーム後、秩父宮ラグビー場クラブハウスにて行われたパーティーに、諸先輩方と共に出席し、クラブの伝統の素晴らしさに触れることができた。

8月に入ると、恒例の合宿である。今さら「地獄の」などといった形容をするまでもないであろう。日頃は親しいOB達も、この時ばかりは憎いものであった。日中の練習もつらいものであったが、夜中に酔っ払って現役の部屋でクダを巻く先輩にはホトホト閉口したものだ。しかし、厳しい合宿を乗り越えた自信は、ラグビーにのみならず、各人の人生そのものの自信にもつながるものであったと思う。この年の合宿での試合は、予想外に良く、メンバー達は秋の大会への期待を大きく持っていた。

秋に入ると、7期の全氏による激励の食事が催された。また、我々は入学以来、千歳伝統の黒いジャージを着る

ことができなかったが、OB会の寄付で、新しい公式戦用のジャージが新調された。これまで毎年ジャージを好き勝手に作っていたが、代々受け継がれる正式なジャージを作っていただけになると、今までの伝統、引き継がれる歴史などが、試合に対する責任と共に胸に重くのしかかる感を覚えた。

そして最後の公式戦、秋の全国大会予選である。対戦相手は、都立青山高であった。春に記念行事に招待され、お互いに秋の大会まで頑張ろうと言いつけていた相手である。我々42期の部員は入学当初は20人近くもいたが、3年時に残っていたのは、ブロップ大野、フッカー尾形、ロック白井、センター松本、木村(純)にケガ等で途中で休部のまま卒業となってしまった米持、木村(玲央奈)の7名だけであった。また、マネージャーとして、石川、高谷の2名がいたが、余談ではあるが、当時の若手OBの間ではマネージャー両名の評判が高かったらしく、毎週末のOBの練習参加の熱心さはこの辺に原因があったらしい。おかげ様で部員の練習の効果も上がったのであろう。

さて、秋の大会、対都立青山高戦である。試合は明大八幡山Gにて、9月22日に行われたと記憶している。3年生5名、2年生も5名、1年生もこれまた5名という、非常にバランスの良い(?)メンバー構成でこの試合に臨んだ。試合の前日には、申込監督による新調したジャージの授与式が行われ、戦う意識が高められた。試合は青山高に先行され、リードを許す展開となった。ほとんど試合経験など無いに等しい1年生の頑張りもあり、終盤の猛追も及ばず、8対13で敗れ、3年間のラグビー部の生活はあっけなく終わってしまった。今思えば3年間負けてばかりであったが、小さくても1つの目標に、メンバー全

1 都立の星となり、花園へ！

●都立青山高校創部40周年

創部40周年を迎えた都立青山高校ラグビー部の記念パーティーが、去る6月16日、秩父宮ラグビー場のクラブハウスにお祝いに駆けつけた都立千歳高校ラグビー部OB会など、200名を超える関係者を集めて、盛大に催



都立青山高校対都立千歳高校OB戦出場のメンバー

された。

出席者の顔ぶれは、終戦直後の創部当時に、ゴールもスパイクもユニフォームもなく、裸足でバスケットボールのようにふくらんでしまったボールを蹴っていたというOBから、その子供よりもまだ若いという現役の高校1年生まで、40年の歴史を感じさせる多彩なもの。

今でこそ都立高校といってもその活躍を耳にするには少ないが、昭和20年代後半には全国大会に出場した千歳高をはじめ、日比谷、豊多摩、大泉など、都立勢の活躍は目を見はるものがあった。

青山高も昭和24年には早くも菅平で夏合宿を行ない、常連となった今日まで続いている。昭和40年代には、事故で1年間対外試合自粛という大騒動にぶつかると、無事この苦難を乗り越えて、都大会ベスト4、さらに関東大会にも顔を出すまでになった。

数年前の慶大で対抗戦優勝の原動力となったNO8ヒゲの権正君も、ここで育った。昔の新人戦ではあったが、当時限りの勢いを誇っていた日高高の公式戦連勝記録をストップさせるという、快挙を成し遂げたのも、やはりこの時期だった。

もっともこの40年間という歴史が築きあげられた裏には、創部以来20年以上の長きにわたって顧問部長として部の面倒を見てきた谷村豊志先生と、それを引き継いだ通称「カガ

バ」こと鈴木昇先生の大きな熱意と愛情があったからこそ、とOBは口を揃えて感謝の意を表わす。

当日は協会担当の田淵理事や、パーティーに先立って行なわれた記念試合（現役戦、OB戦の2試合）の対戦相手、都立千歳高のOB会長などからのお祝いの言葉もあり、盛況のうちに進められた。最後には、菅平の渡辺才智氏から「いつの日か都立の星となって花園出場を」との力強い言葉が飛び、満場の拍手の中、この日の会は幕を閉じた。



こちらは千歳高、青山校の現役メンバー

員で努力を重ねた生活は誠に充実したものであったと思う。また、クラブに属することにより知り合った先輩方や、後輩との付き合いは卒業後、今も続いている。こうした人間関係も千歳ラグビー部で得た大きな財産であると思う。

最後に、我々現役当時に指導して下さった、23期中込監督始めとする諸先輩方、特に37期森江氏、東氏、木本し、38期鈴木(辰)氏、39期出井氏等、毎週の様子にグラウンドに来て下さった方々に、遅ればせながら、この場にて御礼申し上げます。